

「マタイの召命」

§ 047 マコ 2 : 13~17、**マタ 9 : 9~13**、ルカ 5 : 27~32

1. はじめに

(1) 2つの癒しの記事があった。

- ①レプラ患者の癒し (この癒しは、メシア的癒しである)
- ②中風の人癒し (罪を赦す権威)
- ③この箇所から、メシア運動に対する審問の段階が始まる。

(2) **A. T. ロバートソンの調和表**

マタイの召命とイエスを歓迎する食事会 (§ 47)

マコ 2 : 13~17、マタ 9 : 9~13、ルカ 5 : 27~32

(3) この箇所、マタイが第7番目の弟子として召されている。

- ①ペテロとアンデレ (漁師)
- ②ヤコブとヨハネ (漁師)
- ③ピリポとナタナエル
- ④そして、マタイ (レビとも呼ばれていた)

*マタイ自身がメシア的奇跡となった。

*そこで、彼の友人たちがイエスに興味を示し始める。

2. アウトライン (マタ 9 : 9~13)

- (1) 古いマタイ (9 節)
- (2) 新しいマタイ (10 節)
- (3) 立ち上がる壁 (11~13 節)

3. メッセージのゴール

- (1) イエスの招き
- (2) 招きへの応答

このメッセージは、マタイの召命から、教訓を学ぼうとするものである。

I. 古いマタイ (9 節 a)

「イエスは、そこを去って道を通りながら、収税所にすわっているマタイという人をご覧になって、」

1. 中風の人の癒しの出来事の、直後である。
 - (1) 場所は、カペナウムである。

2. マタイという人が収税所にすわっていた。
 - (1) マタイは、いわゆる取税人であった。
 - ①英語で「publican」という。ラテン語の「publicanus」からの借用語。
 - ②本来の意味は、公の職務に就く者という意味である。

 - (2) 同胞のユダヤ人たちから憎まれていた。
 - ①現代の税務署職員とは異なる。

3. 取税人の背景
 - (1) ユダヤ教の口伝律法では、取税人になることは禁じられていた。
 - ①取税人の職は、入札で最高額を入れた者に与えられた。
 - ②取税人の仕事は、ローマ帝国の代理人として、税や罰金を徴収すること。
 - ③この仕事は、大きな利益をもたらすものであった。
 - * 民衆から集めた額と、ローマに納める額との差額が、収入になった。
 - * ローマ帝国は、その習慣を認めていた。

 - (2) ユダヤ人たちが取税人を憎んだ理由
 - ①取税人は、ユダヤ人たちを抑圧しているローマ帝国に加担していた。
 - ②取税人は、同胞から金を盗むことによって豊かになっていた。

 - (3) ユダヤ教の指導者たちは、取税人との交わりを禁止した。
 - ①例外は、取税人同志の交わり。
 - ②罪人との交わり。罪人とは、遊女(娼婦)の婉曲語である。

 - (4) 取税人には、2種類あった。
 - ①所得税を徴収する取税人
 - ②通行税を徴収する取税人
 - * 後者の方が、評判が悪い。
 - * より多くのものをだまし取れるから。
 - * ラビたちは、一般的には正直であることを奨励した。
 - * しかし、取税人にだけは嘘を言ってもいいことになっていた。

*取税人は、盗人であるとされた。

(5) マタイは、通行税を徴収する取税人であった。

「**収税所にすわっているマタイという人**」

- ①彼は、最悪の取税人であった。
- ②ヘロデの領地の外に出て行く舟から徴税した。
- ③ダマスコからエジプトに向かう商人たちから徴税した。

* ヴィア・マリスは、キャラバン隊のルートになっていた。

- ④マタイは、富のために、名声も家族も祖国も捨てた人物である。

II. 新しいマタイ (9b~10節)

1. 9節b

「『**わたしについて来なさい**』と言われた。すると彼は立ち上がって、イエスに従った」

(1) 訳文の比較

「わたしについて来なさい」 (新改訳)

「わたしに従いなさい」 (新共同訳)

「わたしに従ってきなさい」 (口語訳)

「我に従へ」 (文語訳)

「来なさい。 わたしの弟子になりなさい」 (リビングバイブル)

(2) マタイは、イエスの権威を認識した。

- ①突然起こったことではない。
- ②収税所は、情報の収集センターのようなものである。
- ③イエスの教え、奇跡、風貌に深い感銘を受けていた。

(3) これは、徹底的な従順である。

①ルカ 5 : 28

「するとレビは、何もかも捨て、立ち上がってイエスに従った」

②マタイの福音書には、「何もかも捨て」という言葉はない。

「自分の口ではなく、ほかの者にあなたをほめさせよ。自分のくちびるではなく、よその人によって」 (箴 27 : 2)

2. 10節

「**イエスが家で食事の席に着いておられるとき、見よ、取税人や罪人が大ぜい来て、イエ**

スやその弟子たちと一しょに食卓に着いていた」

(1) それからしばらくして、マタイは自宅で「誕生会」を開いた。

- ① 霊的新生を感謝する会である。
- ② 古いマタイには考えられないような、気前のよいことが起こっている。
- ③ 彼自身が、メシア的奇跡になっている。

(2) 招かれた客

- ① 主賓は、イエス。
- ② 次席は、イエスの弟子たち6人。
- ③ それ以外の招待客
 - * 取税人
 - * 罪人(娼婦)
- ④ そして、その外側に群衆やパリサイ人たちがいた。

(3) 「一しょに食卓に着いていた」

- ① ギリシア語で、「スン-アナケイミ」である。
- ② 肘をついて体を横たえるという意味。

(4) ユダヤ的視点では、食事をともにすることは、親密な交わりを意味する。

① 黙3:20

「見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところに入って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする」

(5) ここには、私たちへの教訓がある。

- ① 外向き志向の集会、礼拝の重要性。

Ⅲ. 立ちはだかる壁 (11~13節)

1. 11節

「すると、これを見たパリサイ人たちが、イエスの弟子たちに言った。『なぜ、あなたがたの先生は、取税人や罪人と一しょに食事をするのですか?』」

(1) 彼らは、審問の段階に入っているので、疑問をぶつける。

- ① 直接イエスにではなく、弟子たちに言った。

(2) 彼らの理解では、イエスは不法なことを行っている。

- ①裕福な者が、高名なラビを食事に招待することは、ほむべきことであった。
- ②しかし、マタイは取税人仲間と遊女しか招いていない。
- ③そのような場にイエスが同席していることは、理解できない。
- ④もしイエスがメシアであるなら、このような者たちと交わらないはずである。

(3) 詩1:1

「幸いなことよ。悪者のはかりごとによらず、罪人の道に立たず、あざける者の座に着かなかった、その人」

2. 12節

「イエスはこれ聞いて言われた。『医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です』」

(1) 取税人や遊女は、助けを必要としている人々である。

- ①彼らは、道徳的な意味で病人である。
- ②イエスは、彼らを癒す医者である。

(2) パリサイ人たちは、不遜にも、自分たちは霊的に健康であると考えていた。

- ①霊的癒しを必要としていない。
- ②従って、医者が必要ではない。

3. 13節

『わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない』とはどういう意味か、行って学んで来なさい。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです」

(1) イエスは、パリサイ人たちの霊的状态を非難された。

- ①彼らは、内面(あわれみ)よりも外面(いけにえのようなもの)にこだわった。

(2) 「行って学んで来なさい」

- ①生徒を真理に導くための決まり文句 (Go and learn.)
- ②「来て、見なさい」 (Come and see) と同じ意味である。

(3) イエスが示したのは、ホセ6:6である。

「わたしは誠実を喜ぶが、いけにえは喜ばない。全焼のいけにえより、むしろ神を知ることを喜ぶ」

- ①いけにえの否定ではない。
- ②神は、いけにえ以上に、真実な信仰、誠実、あわれみを喜ばれる。

- ③律法を守っているとの自信を持った人たちへの、皮肉に満ちた命令である。
- (4)「わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです」
- ①このことばは、マタイの人生に成就した。
 - ②パリサイ人たちの問題点は、自分が義人だと思っていること。
 - ③自分は罪人だという認識がなければ、イエスの招きの声を聴くことは難しい
 - ④イエスが人々を2分するとは、このことである。

結論

1. イエスの招き

(1) 権威ある招き

- ①マタイが従っていた権威とは：
- * 宗教的指導者たちの権威に従っていた時があった。
 - * しかし、今はローマ帝国の権威に従っている。
 - * 彼は、富に仕えていた。
- ②マタイは、イエスの権威がいかなる地上の権威よりも上にあることを認めた。
- * 実存的なイエスとの出会い。
- (例話) 犬のしつけ
- * 犬が主導の散歩をよく見る。
 - ・ 引っ張り癖、拾い食い、マーキング
 - * 飼い主がリーダーになる必要がある。
 - ・ 犬にとって最も幸せな状態である。
 - ・ リーダーウォークの重要性

(2) 恵みに満ちた招き

- ①取税人が招かれることは、奇跡的なことである。

(3) 愛に満ちた招き

- ①マタイは、神の愛の中に招かれたのである。
- (例話) メッセージの「あいうえお」(32回目「悪霊に対する権威」)

2. 招きへの応答

(1) 信仰による決断

- ①収税所を去ると、2度との取税人には戻れない。

- ② 収税所そのものは、依然として活動を継続する。
- ③ 犠牲を伴う決断であった。

(2) 賜物を生かす人生

- ① 彼の人生は、搾取から奉仕の人生に変えられた。
- ② 取税人としての経験が生きたことであろう。
- ③ しかし、彼は言葉数の多い人ではない。
 - * 福音書の中で、彼がイエスに質問したという記録はない。
- ④ その彼が、マタイの福音書を書き残した。
 - * これは、ユダヤ人に向けて書かれた福音書である。
- ⑤ ここに、神の大いなる「どんでん返し」(アイロニー)がある。
- ⑥ 私たちも、神の「どんでん返し」になろうではないか。